様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	学校臨床実践コース ／阿形 恒秀

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

学校臨床実践コースの専門性は、コース名にも示されているように、教育の一般的なコンテンツやシステムの開発よりも、個々の教師の人間性に即した「生徒にかかわる資質」の育成・深化に力点を置く点にある。したがって、コースのすべての授業を通じて、①できるだけ具体的な教育場面に即し、②かかわる対象（児童・生徒）だけではなくかかわる主体（教師当人）にも関心を向け、③児童・生徒と教師の関係性を軸に据え理解と指導の実際を考察することで、児童・生徒の成長と自立に資する教師力の一層の充実を図る。また、置籍校等での実習や報告書作成に関しても、上記の観点を踏まえて、院生に対するきめ細かな助言・指導にあたる。

2．点検・評価

①コースの授業に関わっては、学長が示された「学校現場の実践と関連性が保たれている授業」の実現に向けて、実務家教員として、大阪の高校での30年間の経験に常に往還させながら、担当した授業の準備・教材開発に取り組んだ。また、コースで開設している授業は、コースの4名の専任教員が全員または複数で担当しているものが多いので、臨床心理士である他の3名の専門性とは違う、学校臨床の観点からのコメントを心がけた。当然のことながら、場面場面では微妙なニュアンスの違いは生じたが、それぞれの立場からの指導・助言が、全体として、「父性と母性」「厳しさと優しさ」「（狭義の）生徒指導と教育相談」などのテーマに関する院生の洞察を深めることにつながった。
②P1担当として、科目履修・学校アセスメント等の説明会・情報交換会などを実施し、院生に対するきめ細かな助言・指導にあたった。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

学校臨床実践コースP1及び学校教育実践コース1年生の担当教員として、今年度から鳴門教育大学の一員となったという状況を共有する点を活かし、本大学の文化やシステムに慣れるプロセスを共に歩みつつサポートに努める。また、院生に対しては、トレーニングアナリシス（教育分析）をモデルに、教職大学院における2年間を教師としての自己についての洞察を深める「教師分析」の期間ととらえ、＜カリキュラムに基づく学習・研究＞を核としつつも、院生に対する個別指導の場を全人的な対話と援助の場として位置づけ、院生からの言及・相談に応じて＜院生が直面する学習・研究以外の問題＞についても共感的・援助的に関与することで、院生の人間力・教師力を深めていく。

２．点検・評価

①主に教務的な面において、学校現場の校務に比べ説明や提供資料が「わかりにくい」と感じる場面が少なからずあったので、「P1担当」「異校種フィールドワーク統括者」などの役割として業務にあたる際には、様式などの前例をあえて踏襲せずに、工夫を加え改善したり、新たな資料（カリキュラム表・推薦図書一覧・週録の抜粋プリントなど）を作成したりしたが、概ね院生に好評だった。
②「院生とのきめ細かな対話」を意識して、提出レポートや報告書に対しては、A4で2枚程度のコメントを全員に返した。また、年度後半からゼミ指導がスタートしたが、初めてのゼミ生ということもあり、しっかりと時間をかけて助言や文献等紹介、文書の添削などにあたった。院生からは「丁寧な指導」という反応があり、手ごたえを感じた。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

教育の実際の場面に即して＜教師－生徒関係＞を軸に教育活動を考察する「臨床教育」の視座に立脚し、昨年度までの30年間の教諭・教頭・指導主事・校長経験を踏まえて、「生徒指導」「教育相談」の領域における研究に取り組む。具体的には、＜児童・生徒の自立に向けた教師の「優しさ」と「厳しさ」＞、＜教育における「わかる力」と「わかりあう力」＞、＜教師に向けられる児童・生徒の甘えと反抗のストローク＞、＜授業場面での教師と生徒の交流＞などのテーマについて研究に取り組む。
さらに、「生徒指導」「教育相談」以外の領域においても、「臨床教育」の視座から、＜「差別をしない」から「豊かにつながる」への人権教育の転換＞、＜教育における「総合」の概念～「総合学科」「総合的な学習の時間」における学習の意義～＞、＜教育相談の知と心を活かした市民性教育・キャリア教育＞などのテーマについて研究に取り組む。

２．点検・評価

①大学教員としての日々の実践の中で、生徒指導・教育相談に関する「気づき」を、自身の記録「鳴教日誌」として文章化に努めたが、今後の研究の課題・テーマにつながる内容を整理し明確化することができた。
②平成22年度に校長として行った教諭の授業観察・指導助言の経験を踏まえた、論文「授業における教師のコミュニケーションスタイルに関する臨床的考察」を完成させた。年度内の投稿はできなかったので、平成24年度に投稿の予定である。
③科学研究費補助金（研究活動スタート支援）について、『自己・他者・未来への信頼に基づく「志」をはぐくむ学習プログラムの開発』の研究課題で応募した（不採択）。
④神奈川県定時制通信制高校教頭会及び神奈川県総合教育センターとの共同による、不登校に関する調査研究に取り組み、アンケートデータの分析や報告書作成に対する助言を行った。平成24年度に研究論文としてまとめ投稿の予定である。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

公立高校における教頭・校長として、＜生徒・保護者・地域関係者等のニーズ・願いに学校が応えているか＞、＜OJTに基づく学校運営ができているか＞、＜市民目線で見た場合に理解・信頼を得られるか＞、＜説明責任を果たしているか＞などを念頭に置いた学校経営を担った経験を踏まえ、大学教員としてスタートする今年度は、「高校運営の在り方」と比較して違和感を感じた「大学運営の文化・システム」を一つ一つ丁寧に吟味・検証し、大学において必要なものについては自身が適応するように努めつつ、改善の必要な点については積極的に提言を行っていく。また、さまざまな手続きや諸会議にあたっては、単にこなしていくだけでなく、その根源的な意味を考えながら取り組む。

２．点検・評価

①当初は大学の諸会議への戸惑いもあったが、年度の中ごろから始まった教職大学院のカリキュラム改編の議論にあたっては、学校経営の経験を踏まえ、提言や参考資料の提供に努めた。
②入試関係の業務を担当したが、高校における「入学者選抜業務」の在り方と比べた場合に、改善の余地があると思われる点がいくつかあり、会議で発言した。今後も、大学運営にかかわって気づいた点は、積極的に発言していきたい。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

教員養成大学の学術知は、教育現場の学校知と地域社会の世間知とつながることで深化を図ることができるという観点に立って、地域連携の取り組みに積極的に参画する。附属学校との連携については、大阪府教育委員会において「大阪府教育センター附属学校」の基本構想立案を担当した経験を活かして、附属学校に出向いての臨床的な授業研究などの可能性を模索する。また、地域社会に出向いの講演や助言の機会があれば、積極的に引き受けていく。さらに、国際交流に関しては、留学生との交流事業などを通じて、他国の教育事情に触れ日本の教育の在り様を相対化し考察する契機とするとともに、本大学の国際貢献に協力する。

2. 点検・評価

①教育支援講師としての講演、生徒指導研修会での助言・講演など、地域連携の取り組みに積極的に参画した。
②附属学校との連携については、「ライブ附中タイム」の取り組みで、中学生全員を対象に「こころの不思議 ～もうひとりの『自分』との折り合い～」のテーマで講演を行った。また、ケース会議に出席し、助言を行った。
③附属中学校の保護者会の企画で、保護者を対象に「拝啓 十五の君へ ～ 十五の頃の私、そして十五の子どもと向かい合う私 ～」のテーマで講演を行った。また、保護者相談を1件担当した。
③国際交流に関しては、中日教師教育学術研究集会準備委員会のメンバーとなり、平成24年度の研究集会の準備にかかわった。

Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）